

九頭竜川、日野川、足羽川に囲まれた地域には、人口や資産が集中する福井市街地を抱えている。

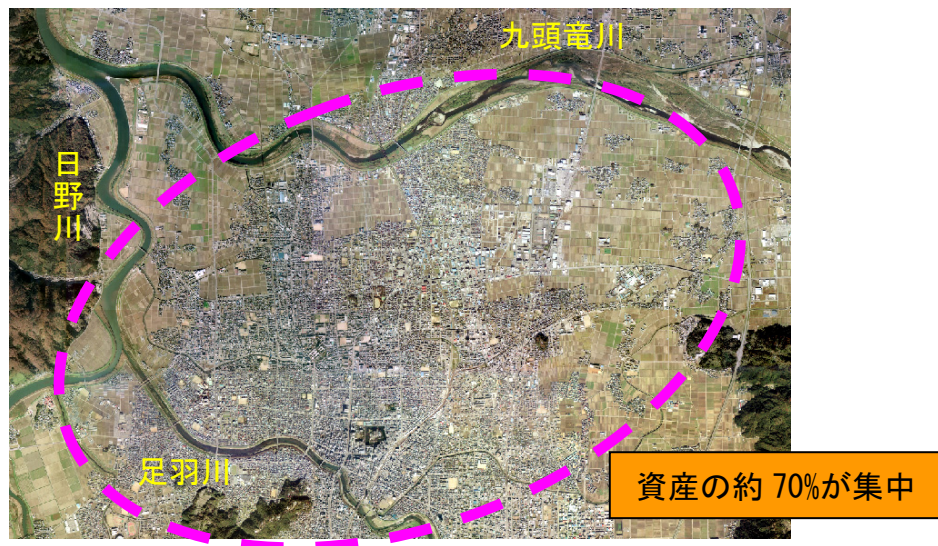


図 3-2 資産が集中する福井市街地

(2) 土地利用の変遷

九頭竜川流域の土地利用については、山地が約 81%、水田や畑地等の農地が約 13%、宅地等の市街地が約 6%となっている。昭和 50 年(1975)から 25 年間には、山林面積は 1.9%増加し、農地は 2.3%減少している。宅地は 0.4%の増加である。

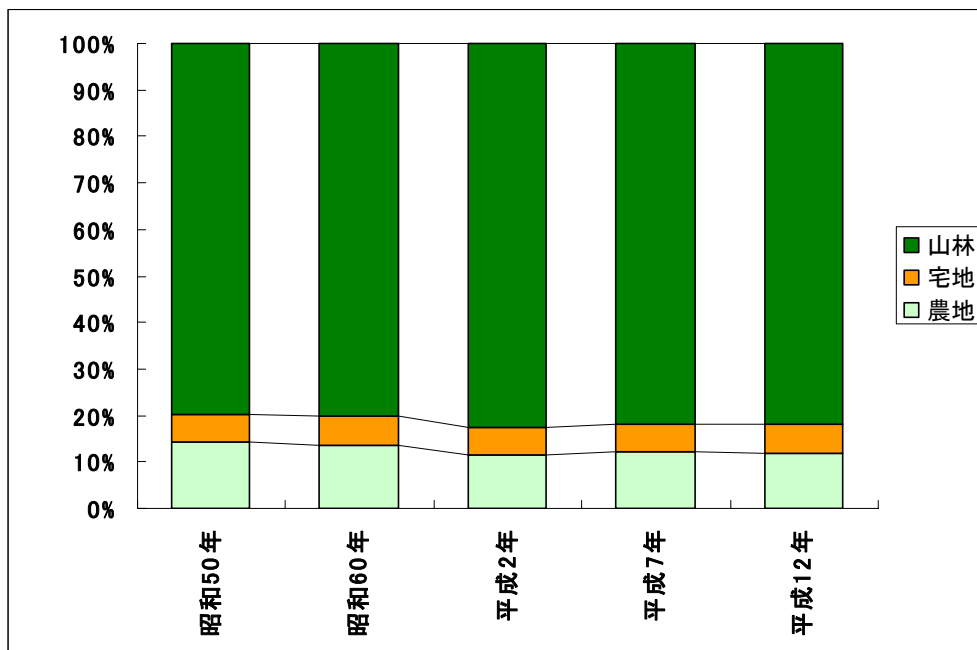


図 3-3 地目別土地利用の推移

(出典：河川現況調査結果・福井河川国道事務所)

3-2 人口

流域内には、福井県の県庁所在地であり流域内人口の約4割が集中する福井市のほか、越前市、鯖江市をはじめとする7市8町を擁し、流域内市町村人口は約64万人である。

大正9年(1920)からの推移では、途中で人口増加割合に変化はあるものの増加傾向にある。流域別の増加傾向では、九頭竜川・日野川・足羽川下流域、日野川中流域、兵庫川・竹田川流域で増加傾向、足羽川流域、真名川流域、日野川上流域で減少傾向、本川、天王川流域で平衡している。

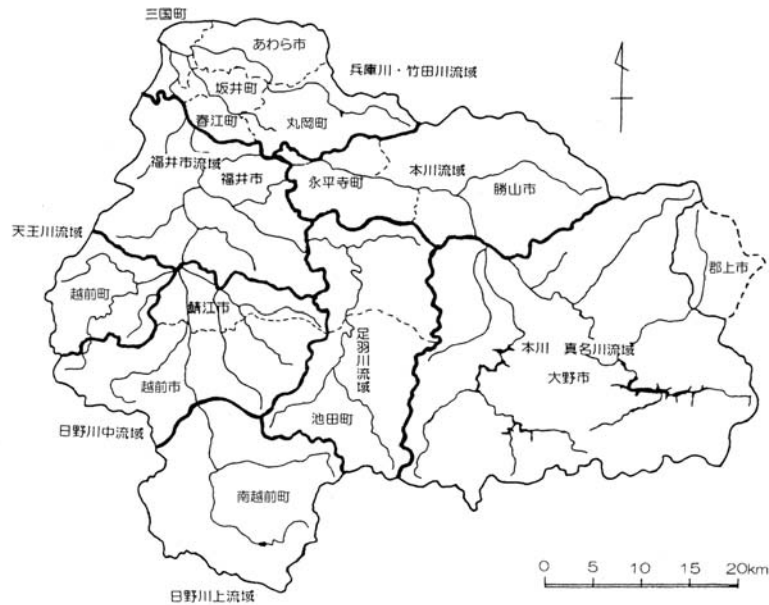


図 3-4 流域区分

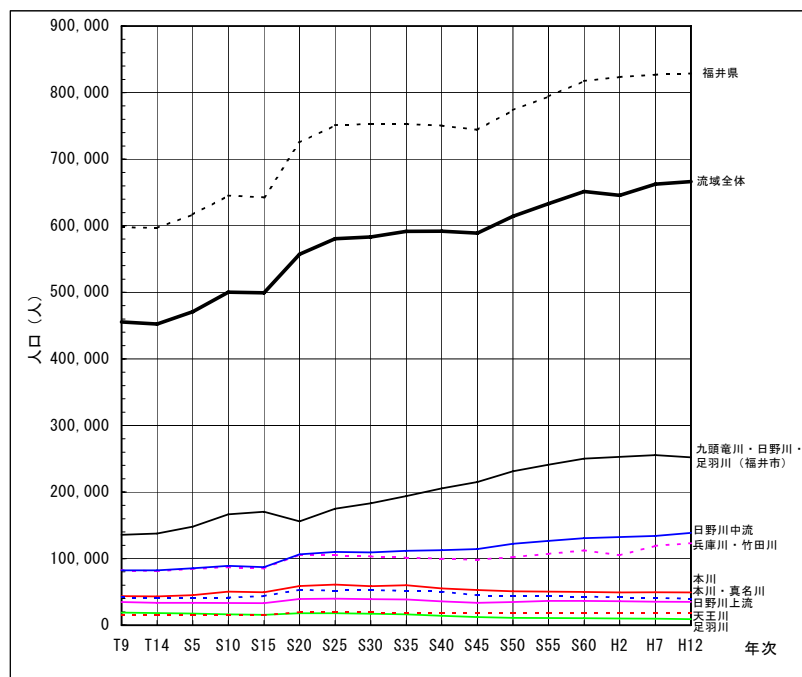


図 3-5 流域別の人口推移 (H12 国勢調査時点の人口)

3-3 産業・経済

(1) 産 業

九頭竜川流域は、福井平野や武生盆地といった肥沃な沖積平野があるため農業を中心に発達してきた。現在も豊かな水田地帯であり、「コシヒカリ」などの生産地となっている。また、畑地では大豆や大麦、ハウスでのきゅうりなどの野菜づくりや花きづくりも盛んである。河口の三里浜砂丘では、花らっきょうや砂丘大根が有名である。

工業では繊維工業が最も盛んである。これは福井県の工業のなかに占める割合も高く、福井市を中心とした都市部はもちろんのこと、農村部にも多く立地している。なかでも、福井市周辺は曇天日数が多く湿度も高いことから、羽二重で有名な絹織物を主流とした織物工業が発達した。

福井市、鯖江市、越前市では眼鏡産業が盛んで、プラスチック成形・メガネ枠工場が多く立地している。三国町・あわら市・坂井町などでは、一般機械・電気機械・化学・製紙などの企業進出がみられる。

伝統産業では、越前市五箇地区の和紙業、同市の打刃物業、鯖江市の漆器、越前町の越前焼などが有名である。

近年は、福井市を中心に商業・サービス業といった第3次産業が多数立地してきている。また、豊富な名勝・旧跡や温泉などを活かした観光産業も盛んである。



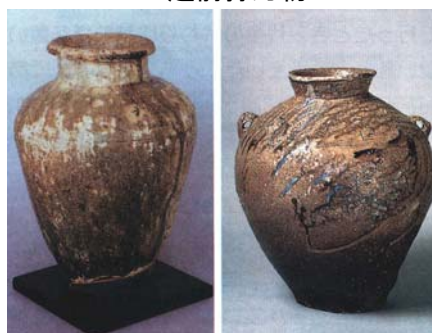
越前和紙



越前打刃物



越前漆器



越前焼

図 3-6 伝統産業

平成7年(1995)の産業別就業人口比率は、1次産業が6.1%、2次産業は39.3%、3次産業は54.6%である。

昭和35年からの産業別就業人口比率の推移は、1次産業で30.6%の減少、2次産業で8.4%の増加、3次産業で22.2%の増加となっており、福井市を中心に商業・サービス業などの第3次産業が多数立地してきている。

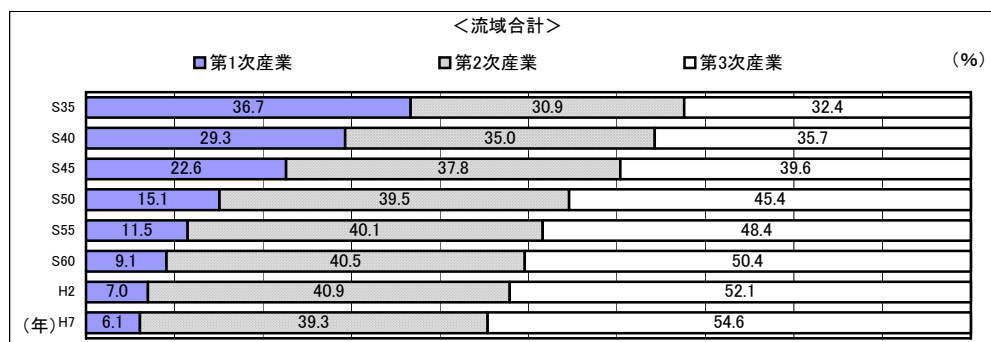


図 3-7 産業別就業人口の推移

(2) 観 光

九頭竜川流域は、歴史・文化や水と緑などの自然に恵まれた観光地が多く点在し、年間約1,850万人（福井県全体の約68%）の観光客が訪れる。その代表的な観光資源には、天下の絶景として有名な東尋坊、芦原温泉をはじめとする各地の温泉、中世を今に伝える一乗谷朝倉氏遺跡・永平寺・平泉寺・丸岡城、恵まれた森と水を生かしたアウトドアレクリエーションが満喫できる九頭竜湖と九頭竜国民休養地や六呂師高原などといったキャンプ村・スキー場、北陸の秋の風物詩として人気の高い武生菊人形などがある。

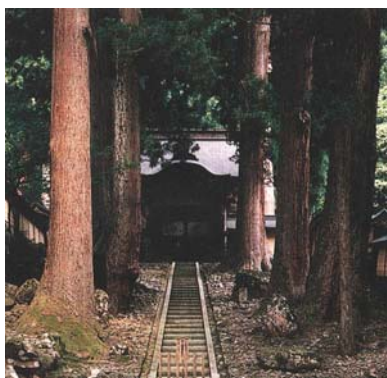
一方、県民の憩いの場としては、越前松平家の別邸であった養浩館庭園、九頭竜川沿川の弁天桜並木、足羽川堤防の桜並木などがある。九頭竜川のアユ釣りも有名である。



東尋坊



朝倉氏遺跡（唐門）



永平寺



白山平泉寺



六呂師高原スキー場



足羽川堤防の桜

3-4 交通

福井県は北陸および出羽と畿内とを結ぶ位置にあるため、古来より交通上の要衝にあたり、陸海両交通のうえで重要な役割を果たしてきた。

陸路では、北陸道が近江の長浜で中山道から分かれて南条山地の栃ノ木峠を経て越前に入り、武生盆地・福井平野と嶺北を縦断して加賀へと通じていた。

この他、福井から九頭竜河谷を経て美濃へ通じる美濃街道、勝山に到る勝山街道があった。

一方、水上交通のうち河川交通はとくに盛んで、九頭竜河口の三国港を海への出口として、九頭竜川・足羽川・日野川・竹田川などによって勝山・宿布しゆくぬの・鯖江・金津などの舟運があった。

明治以降は従来の街道が改修され、北陸道は国道 8 号線となって嶺北を縦貫する幹線道路となった。流域内には、この他、奥越電源開発に伴って整備され、中京への最短路をなす国道 157 号線、これに連絡する福井―大野間の国道 158 号線などが整備された。

昭和 48 年に小松～丸岡間の北陸自動車道が開通し、昭和 55 年の敦賀～米原間の開通によって名神高速道路とも接続した。

現在、福井市と中京を接続する中部縦貫自動車道の建設が行われている。

鉄道では、明治 17 年に長浜～敦賀間に北陸本線が開通し、明治 29 年に森田に延び、翌年金沢まで通じた。この嶺北を縦貫する北陸本線は、近畿・中京と北陸とを結ぶ幹線をなし、北陸地方の経済発展に大きく寄与した。

さらに、現在では北陸新幹線の工事が始まっており、高速交通体系の確立により、大阪・名古屋・東京方面との経済活動の活性化が期待される。

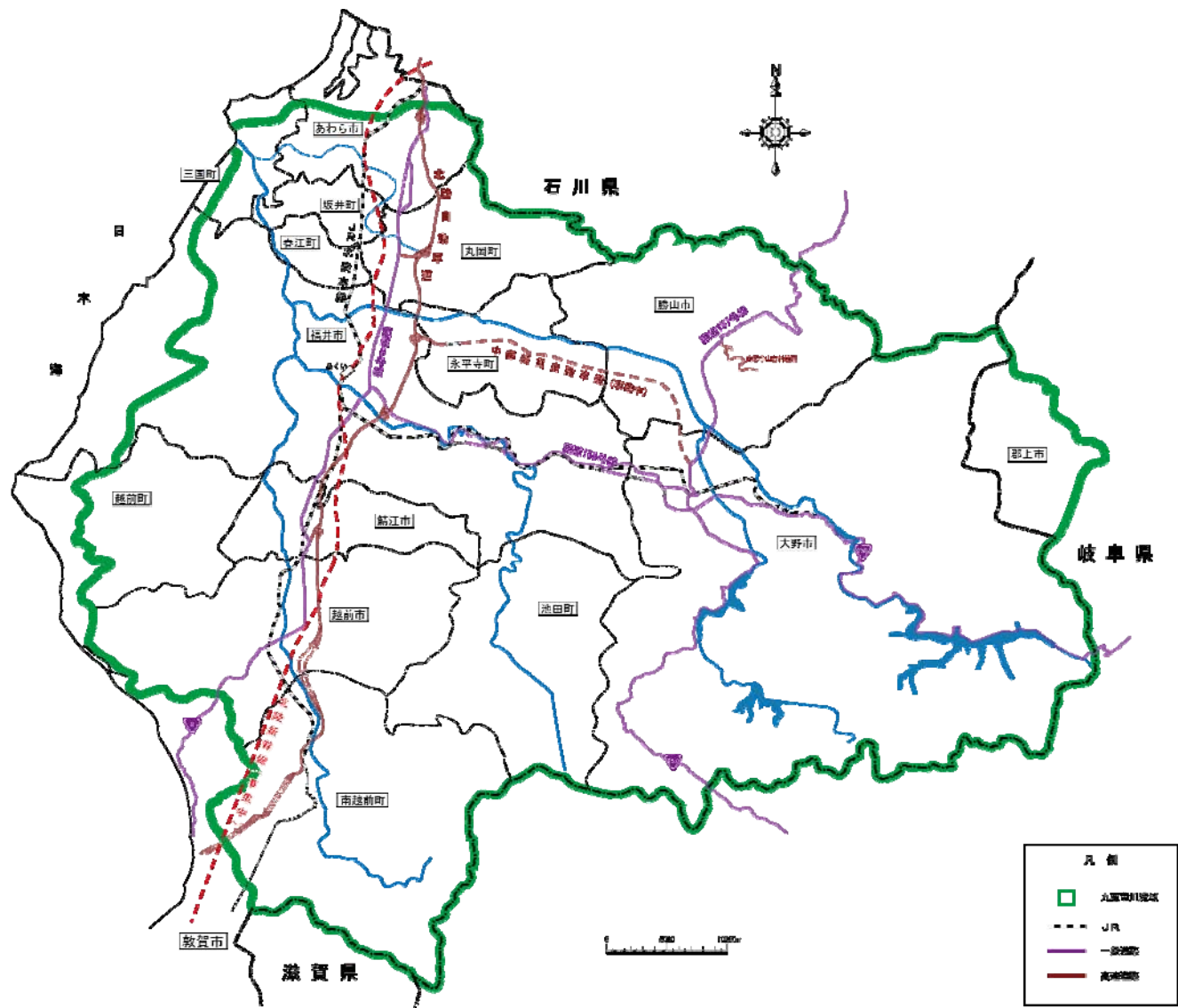


図 3-8 九頭竜川流域の主な交通路

3-5 流域の動向

「近畿の将来の姿」は、今後の近畿の目指すべき地域づくりの指針とすることを目的として、「関西広域連携協議会」と「近畿広域戦略会議」が平成16年7月にとりまとめたものである。「近畿はひとつ」の理念のもと、将来の近畿づくりに関わる様々な機関や住民が広く共有し、それぞれが役割を果たしつつ、連携・協働しながらその実現に向けた取組みを推進していくことを目指すものである。

■「近畿の将来の姿～社会資本の着実な整備に向けて～」(平成16年7月)

長らく日本の政治・経済・文化の中核圏域として蓄積してきた歴史、文化、伝統を活かしつつ、それぞれが特有の個性を持つ地域で構成されている近畿を、「近畿はひとつ」の理念のもとに結集して総合力を発揮し、都市の再生、身近な自然との共生、国際交流の伝統を活かした多文化との共生を図りながら、文化の香り高く、にぎわい、活力あふれる地域として再生することを目指し、次の施策を展開する。

《活力》

地域住民や市民団体等多様な主体の参加・連携を得ながら、住む魅力、訪れる魅力を高める都市の再生や内外との交流ネットワークの充実、観光の振興に向けた基盤整備などを進めるとともに、近畿の魅力を世界にアピールすることなどにより、国際集客力の向上を図る。

《産業》

産業の活動基盤となる情報・人材・物流などのネットワークの充実を図るとともに、ライフサイエンスや次世代ロボットなど近畿が強みを持つ産業の育成に資する社会基盤の整備などを進める。

《安全・安心》

阪神・淡路大震災の教訓を活かし、東南海・南海地震などの広域的な災害や集中豪雨・高潮・豪雪等による災害への対策を推進するとともに、大規模災害や重大事故に備えた危機管理体制の強化、住民の危機意識の向上を図る。また、地域コミュニティに支えられた福祉社会を支える社会基盤の充実やユニバーサルデザインの推進などにより、安全・安心なまちづくりを推進する。

《歴史・文化》

地域住民や市民団体と連携しつつ、我が国随一の歴史的文化資産の集積を活かした「美しい近畿」づくりを進めるとともに、世界の人々を惹きつけ、来訪・定住しやすい環境の整備を進める。また、これらの蓄積を活かした観光の振興を進める。

《環境》

地域住民や市民団体と連携しつつ、琵琶湖から大阪港ベイエリアに至る水と緑のネットワークなどの保全・再生に取り組むとともに、人と自然のふれあいの回復や生物多様性の確保に努め、自然と共生した美しい地域づくりを進める。また、ヒートアイランド現象の抑制など都市環境の改善を図り、リサイクルの推進など循環型社会の構築を図る。

「近畿の将来の姿」において九頭竜川流域に関する構想には、以下のものがある。
○ITを戦略的に活用した「新事業・ベンチャー創出拠点」の形成(近畿広域戦略会議)

- 近畿のポテンシャルを活かした「次世代ロボット産業」拠点の形成（近畿広域戦略会議）
- 近畿をにぎわいの空間に－「ウェルカム関西プロジェクト」の推進（近畿広域戦略会議）
- 自然・環境にやさしい「循環型社会」の形成（近畿広域戦略会議）
- 福井市中心域・水と緑のネットワーク（福井県、福井市）

また、九頭竜川水系にかかわる基本計画として、以下のものがある。

■「九頭竜川水系河川環境管理基本計画」（平成2年3月）

国土交通省近畿地方整備局、福井県、岐阜県は、九頭竜川水系の河川環境の保全と利用についての指針を示し、適正な管理に資するため、河川利用についての「河川空間管理計画」と、河川環境についての「水環境管理計画」を2つの柱とする「九頭竜川水系河川環境管理基本計画」を策定した。